



E-Defense

E-Defense Today

(Published by E-Defense, NIED, May 12, 2009, Vol.5 No. 1)

“E-Defense Today”創刊から4年—これからの1年を過ごすにあたって

兵庫耐震工学研究センター (E-ディフェンス) センター長 中島 正愛

E-ディフェンス (兵庫耐震工学研究センター) は2005年4月に開設、この4月から5年目の活動に入ります。開設にあわせて創刊した“E-Defense Today”も5年目を迎えました。創刊号で私は、『私たちはなぜ発行したくなったのか、センターからひとこと』と題する一文を記しました。創刊時を思い起こしたくもあり、その一部を下記に再掲します。

“E-Defense Today”創刊号を皆様にお届けいたします。ご承知のように、2004年10月1日に「兵庫耐震工学研究センター」が発足しました。当センターは、地震災害とその防災を中核研究の一つとする防災科学技術研究所 (防災科研) が、耐震工学の高度化を通じた地震防災の促進をはかるべく、多額の資金を投入して整備した大型震動台施設 (通称: E-ディフェンス) を適切に運営する任を負っています。防災科研の一員としての自覚をもって皆様とともに日本と世界の地震防災に貢献したいと、センター職員一同心して努力しているところです。

しかしながら、つくばから700km以上離れた土地で研究に励む私達の活動を、防災科研本所の皆様にご理解いただくことは容易ではありません。そこで、私達は、日頃の活動の一端を皆様にお伝えし、われわれの活動とその思いを皆様と共有したいと考え、“E-Defense Today”と銘打ったニューズレターを定期的に発行することにしました。古今東西、数え切れないほどの雑誌・新聞類が刊行されていますが、そのほとんどが第3号で廃刊の憂き目にあうことは、すでに歴史が証明しているところです。歴史に逆らって無謀にもニューズレターの発刊を強行したわれわれは、次の編集方針を掲げました。

- 本ニューズレターが少なくとも第3号を越えて生き残れることを当面の目標とする。
- 上等なものをねらうあまり発行のために多くの時間・エネルギーを費やす所業には及ばない。
- A4裏表で1頁、特集号でも2頁を上限とする簡潔を旨とする。
- 前向きな取り組みを自らにも鼓舞すべく、明るい話題の提供を心がける。
- 皆様が関西への出張のついでにE-ディフェンスに立ち寄ってみようという気分になる(なって欲しい)、鮮度の高い情報を提供する。

さて4年を経て・・・まずこのニューズレターはなお生き残っていますし、毎号2~3頁の分量を堅持しています。継続に尽力いただいたE-ディフェンス企画室や執筆者の方々に敬意を表します。

“E-Defense Today”は、その時々E-ディフェンスが手がける実験の速報を中心に構成されているものの、実験研究を支える業務部門、総務部門、企画部門等の有志からの投稿も適宜加えるなど、E-ディフェンスに集う職員の情報交換と交流促進の場としての役割も果たしています。

外部 (E-ディフェンスの外) に対するアピールはどうでしょうか。理事長を始めとする防災科研執行部や、文科省地震調査研究課や防災科学技術推進室の方々には、大規模実験等にあわせて定期的にE-ディフェンスを訪問いただいています。また過去4年間、多くの外部研究者の協力を仰ぎながら実験を進めたことも幸いして、研究コミュニティ (建築系、土木系、機械系を中心に) への認知は高まり、研究論文もたくさん生産することができました。一般市民に対する公開実験も定期的に開催し、毎年**8,000名程度**の見学を受けています。

とこここまで書いて・・・防災科研つくば本所で研究に励む方々のうち、一体何人にE-ディフェンスへ来てもらっただろうかと、はたと考え込みました。ご承知のように、近い将来他の組織と一緒にいる可能性が高い防災科研ですが、たとえ組織が変わろうとも、**46年**の歴史を誇る防災科研がもつアイデンティティ (遺伝子) を引き継いで、これからも意気高く防災研究を展開してゆかねばなりません。そんなかけがえのない仲間であるはずのつくば本所の皆様には、今年こそはE-ディフェンスにお越しいただいて、われわれが手がける大型実験を見学していただきたいのです。つくば本所研究者の来訪促進を、E-ディフェンスが掲げる今年度の重点目標の一つに加えたいと思います。

第2回日中科学フォーラム「汶川地震と防災科学技術」



2008年5月に中国・四川省で発生したM8.0の汶川地震は、多くの人的・経済的・社会的被害をもたらしました。このような巨大地震による災害は、日本でも将来起こり得ることです。日本がこの地震被害の復旧・復興に寄与すると共に、日中両国における将来の巨大地震による災害への対策につなげるためには両国の連携した研究推進が重要であるとの観点から、「汶川地震と防災科学技術」をテーマとした第2回日中科学フォーラム（主催：日本学術振興会、共催：中国地震局、後援：中国国家自然科学基金）が、2009年3月9・10日に中国・北京の北大博雅国際会議中心において開催されました。

増子地震・防災研究課長、貝原元兵庫県知事、中国地震局のPeizhen Zhang教授とMengtan Gao教授による基調講演の後、日中の研究者・技術者により「地震学・地質学的特徴」、「構造物被害・斜面崩壊と復旧」、および「被災地社会の復旧・復興」をテーマとした研究成果報告と議論が行われました。これらに基づき、フォーラム共同委員長の濱田早稲田大教授とMengtan Gao教授から、日中協力の枠組み、共同研究の推進、および人的交流の促進に関するフォーラム総括がなされました。耐震工学研究分野については、セッション総括において今後の日中共同研究の方向性として「現象の検証とシミュレーション」が提示され、そのうちE-ディフェンスを利用した実験が検証手段の一つとして挙げられたことから、日中両国の研究者のE-ディフェンスとその実験研究への強い関心が感じられました。

フォーラムの開催後、汶川地震の被災地視察が行われました。四川省地震局による中国での地震と地震観測に関する説明の後、成都近郊の都江堰や彭州、東河口、江油等において、石造アーチ橋や鉄筋コンクリート建物の損壊、地滑り等を視察しました。被災地のうち、市街地での復旧はほぼ終了したように見られましたが、郊外から山間部では数千戸規模の仮設住宅が依然数多く設置されていると同時に、活発な住宅再建や道路等の復旧工事が見られました。また、彭州と東河口では被災現場が保存・整備され、看板設置等による情報提供が行われており、実際の被災現場を国民の防災教育・意識向上にも積極的に活用しようとする姿勢が見られました。

（文責：研究チーム 田端 憲太郎）

はじめまして

4月1日より業務室長を命ぜられた甲斐芳郎です。

27年間建設会社に勤務しての転職、初の関西勤務、初の単身赴任と初物尽くし。本人にとっても訳がわからなくなるような環境の変化なのですが、所員の皆様には、特に業務室の皆様にはそれ以上の悪影響を与えてしまったのではと懸念しています。幸い、阿部前室長の職場整備と、優秀な業務室メンバーの自発的な行動力により、何事もなかったかのように業務室は正しく機能しています。皆様に本当に感謝です。

経歴について紹介します。大学ではRC建築構造の耐震が専攻でした。客員研究員の五十嵐さん、関さんには大学時代から懇意にさせていただいております。先の勤務先では、もっぱら原子力発電所の耐震にかかわる研究開発を、主に電力会社からの受託研究という形で行ってきました。それ以外にも時には社内の自主開発にも加わりました。例えば最近では、上下方向の地震力に対しても免震機能を持つ3次元免震のマンションの建築構造評定対応に携わりました。

業務室担当ということで、施設の運用が第一の使命ではありますが、せっかく世界最大の実験施設に関わることができましたので、何らかの研究成果もあげることができればと思っています。研究チームの皆さんとも楽しくお付き合いさせていただければ幸いです。

まだまだ見習いの状態ですが、兵庫センターがますます発展し、さらに大きな成果が生まれることに微力ながらお手伝いできればと思っています。末長くご指導いただきますようよろしくお願いいたします。

（文責：業務室 甲斐 芳郎）



自己紹介

4月1日より、兵庫耐震工学研究センター総務室にてお世話になることとなりました平井淳子と申します。E-ディフェンスでの勤務開始から約2週間が経ちましたが、多様な仕事が発生する毎日に、今はまだ、ただただ慣れていくのに精一杯といった感じでございます。

前職等においては、大学医学部で勤務した経験や、医療関係機関で再生医療に関する研究の支援事務等を担当し、医療に関する研究については身近に感じられることも多かったのですが、この度は、



当然ではございますが、今までとは全く異なる研究内容、特に実験施設や設備の規模の大きさに、こちらも戸惑うことは多いですが、この様な非常に貴重な施設にて勤務できることは、私にとっても、良い経験になるものと思っております。

とにかく、焦らずとも、全てにおいて早く慣れて、一日も早くE-ディフェンスの一員としてお役に立てる様に、業務に励みたい所存でございますので、ご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

(文責:総務室 平井 淳子)